戦国太平記

真田幸村

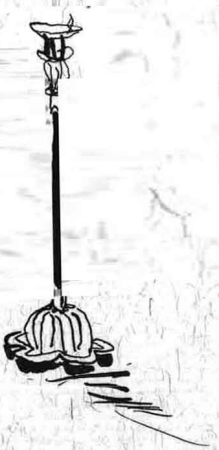
（上）

太平記

真田幸村

（上）

松山善三・井口朝生　共著



光風社書店版

戦国太平記
真田幸村(上)

昭和四十二年五月十五日　初版発行
昭和四十二年十一月十五日　再版発行
《検印省略》

定価　三六〇円

著者　松井三善
発行者　山口朝生
印刷者　豊島澂
　　菅生定祥

発行所　株式会社光風社書店
東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目

次

一 書狀 七
二 鴉 三五
三 不動 四三
四 野盜 五九
五 幽鬼 六五
六 輿 七二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七　動く　一四二
八　畜生塚　一六四
九　落日　一八六
十　毒酒　二二八
十一　絆　二四〇
十二　流言　二五七

題字　朝比奈宗源

装幀　三井永一

挿画　東啓三郎

戦国太平記

真田幸村 (上)

一　書　状

真田昌幸のもとへ、大谷吉継から、全く不意にその書状が届いたのは、慶長三年三月初旬のことである。

――かねがね約束のあった貴殿の御次男左衛門佐幸村どのと、自分の娘浪江との縁組を、今春、改めて成立させたいと思う。ついては近々のうちに娘をそちらへ輿入れさせるから、よしなにお取り計らい願いたい。

吉継の使者が越前敦賀から、はるばる信州上田城へもたらした書状は、そういう簡単なものであったが、しかし昌幸にとっては、かなり複雑重大な問題を含んでいた。

昌幸は短い文面をていねいに一読、再読すると、銀色に光る剛毛の白髪頭をちょっとかしげた。

殆んど忘れかけていた厄介なことをいきなり催促されたという感じに、戸惑いとためらいとわずらわしさがあった。

「いかが致しましょうや？」

書状を取次いだ老臣、高梨内記が、昌幸の気むずかしい沈黙を、やんわりと押し分けるように訊いた。

「使者は？」

昌幸は細く鋭い視線をゆっくり老臣へ当てた。

「別室に控えております」

「ゆるりともてなしてやれ」

「お目通りを乞うておりますが？」

「いずれ後刻」

昌幸は言って老臣をさがらせた。それから封書を注意深く手文庫に納めると、やおら立って広縁へでた。侍童がいそいで履物をそろえた。

本丸の一角に、あらゆる建物から独立した三層の天守櫓があった。望楼ともよべそうな小さな天守だが、構造は見るからに堅牢にできていた。

昌幸は居城にいる限り、日に一度は必ず天守櫓に登ることを日課にしていた。四季を通じてそう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だったが、時間は一定していなかった。朝起き抜けに櫓上に立つこともあれば、午後のいっときをそこですごすこともあり、夕方になって登ることもあった。

昌幸のこの気まぐれな日課の供をする侍童は、ひどくせわしい思いをしなければならなかった。まず天守櫓の出入口の鍵をはずし、扉を明け、昌幸を内へ入れてから、こんどは先に梯子ともよべる狭く急な階段を駈け登り、昌幸が上に来るまでに四方の窓を開いておくのである。櫓の窓の戸は、ことごとく薄鉄を張った厚い杉戸である。年少の侍童にとって、この重い戸を開く仕事は容易ではなかった。昌幸が登って来るまでに間に合わないこともあった。そんな場合、昌幸は侍童を叱りはしないが、また手を貸そうともしなかった。侍童の仕事がすむのをじっと待っていた。そして侍童も窓を開き終ってから詫びることはないし、昌幸の方も息を切らし汗をかいている侍童にねぎらいの言葉をかけるというような例はなかった。昌幸の寡黙な日常が、側近の者にもそうした習慣を作らせていた。

侍童が窓を明け放すと、薄暗い櫓の内部に、陽光と風が舞い込んで来た。信濃は春の訪れが遅い。三月初旬はまだ冬景色である。空は晴れていても午後の日差は弱々しく、風は寒く荒々しかった。

昌幸は天守櫓から眺める上田の景観を愛していた。長年にわたって見馴れている風光だが、見飽きるということはなかった。寒風に吹かれながら、四方の窓をゆっくりと巡りあるいた。

東には残雪に覆われた野づらのかなたを、神川の激流が横切っていた。北には東太郎山、太郎山、

虚空蔵山のつらなりが雪を纏ってそびえていた。南は眼下の千曲川が、まだら雪の広い河原に幾筋かの細い流れを走らせていた。西をさえぎる岩鼻の険も雪に白くかがやいていた。このように山と川に囲まれた盆地の要害を、真田の居城は占めていた。

上田城は昌幸の誇りであり、昌幸が興した真田家の武名の象徴であった。

昌幸は武田の臣、真田幸隆の第三子であった。

幸隆は信濃真田庄の小城主で、はじめ北信の豪族村上義清に属していたが、武田晴信が信濃へ進出するに及んでこれに従ったのである。晴信が剃髪して信玄と号した時、幸隆も頭をまるめて一徳斎と号した。

こうした関係があって、昌幸は若くから信玄に仕え、のちに足軽大将まで勤めた。

信玄は、この恐ろしく無口で、しかも、うかと人を寄せ付けぬような、冷厳なものを身に備えた若侍を、愛顧した。実際、昌幸は信玄の側近にいても、普段は孤独で余り目だたぬ存在だった。自分から発言したことはなかった。しかし物を問われると、周囲の者が驚く程、適確な答え方をした。同じように進んで役目を買ってでることはないが、命じられたことは毫も手ぬかりなくやってのけた。合戦の場合もそうだった。先陣を願いでたり、華々しい働きを求めるようなことはなかった。与えられた任務のみを遂行した。それも完全に果した。こんなぐあいだから、殊勲をあげた戦歴は

なかったが、真田の伜は物の用に立つという評判は、誰しもが認めるところになった。そして昌幸は、信玄の命によって、武田の支族武藤氏を嗣ぐことになった。彼は武藤喜兵衛尉と名のり、京都より公家の菊亭（今出川）晴季の女を室に迎えた。

天正元年に信玄が歿し、武田は勝頼の代になった。翌二年には一徳斎幸隆が亡くなった。

天正三年、武田勝頼は長篠合戦において織田・徳川の連合軍に敗北した。この時、昌幸の長兄次兄が共に戦死した。昌幸は旧姓に還り、はじめて信州上田城主となった。二十九歳であった。

勝頼が長篠敗戦後の形勢挽回に焦って、家康と小ぜり合いをくり返すうちに、五年の歳月がすぎて天正八年になった。昌幸は上野沼田城主を攻略して付近の地を近領に併せた。主家武田の威信が急速に衰えつつある時、昌幸は真田六文銭の旗じるしを上州へ押し進めたのである。

天正十年春、ついに武田勝頼が滅亡した。昌幸は織田に属した。それから数カ月たつと信長が本能寺の変に滅亡するという不測の事態が起こった。昌幸は徳川に属し、嫡男信幸を家康のいる浜松へ人質として送った。そしてこの機会に上田城の改築をいそいだ。

真田は一徳斎幸隆の代から、村上、武田、織田、徳川と主家を変えた。

「小城主とはあわれなものぞ」

昌幸は、父の幸隆が村上義清のもとを離れて、甲斐の武田に属すことになった日、ふと漏らした感慨を、胸に刻み込んでいた。

一、右へなびき左へなびき、あなどりを受けそしられながら、家名を保たねばならぬ」

一徳斎幸隆はそうも言った。小城主は雄家を頼らなければ存続できない時世であった。父の一徳斎が信玄と共に剃髪したことすら、武田という巨大な権勢によって、真田のささやかな家名を安堵して貰うための媚態であったことを、昌幸は知っていた。

昌幸は真田家を相続したが、父から屈辱と自嘲の教訓を受け嗣ぐつもりはなかった。たとえ小城主なりといえども、昌幸は武門としての矜持があった。自負心もあった。権勢に屈辱的な安堵を乞うのではなく、畏怖されて雄家より迎えられるようになりたかった。自嘲ではなく、自尊の柱に六文銭の旗じるしを掲げたかった。必ずやそのような日が来ると信じていた。そのために昌幸は上田城の防備強化を計ったのであった。

天正十三年になった。当時、豊臣秀吉と敵対していた家康が、北条氏と同盟した。この際、真田の上野沼田城を北条氏へゆずり渡すという条件が交されて、家康はそれを昌幸に命じた。

昌幸は拒否して徳川と絶った。家康は真田討伐のために大軍を動員して、信州上田城を攻囲した。昌幸は二千の兵をもって籠城し、びくともしなかった。それどころか隙を窺って城外へ奇襲、逆襲しては徳川軍をひどく悩ませた。その間に昌幸は次男幸村を人質として越後へやり、上杉景勝へ提携を申し入れることを計った。一方では豊臣秀吉もまた景勝へ、真田との協力をしきりに指嗾した。秀吉の関白叙任を朝議で斡旋した今出川晴季の女が、昌幸の室であったことも、こうした裏面工作

に効を奏した。そして上杉軍が上田城の後援に進軍して来る情勢に、家康は止むを得ず全軍を撤退しなければならなかった。昌幸は秀吉に属すことになった。

翌年の夏、家康は再度、真田討伐の軍を動員しようとした。この時家康はすでに秀吉と和睦していたので、秀吉より、上田城は豊臣に服している城だから攻めないでほしいと取りなしがあって、家康は討伐を断念した。結果において、信州という半蔵は雪に埋もれている草深い山国の一小城主が、豊臣を動かし上杉を操り、徳川と互角に渡り合って、地位を確保したのである。その頃から昌幸の声望は頓に高くなった。

天正十七年、秀吉が北条氏と和した際、北条氏はふたたび上野沼田城を要求した。こんどは昌幸も秀吉の説得があって沼田城をゆずり渡した。昌幸にはひそかに期するところがあった。そして彼の予想通り、年改まって天正十八年になると、秀吉は北条氏討滅の軍令を諸国へ発した。昌幸はたちまち沼田城を奪還すると、豊臣軍の先鋒となって上野、武蔵に転戦し、北条方の諸城を抜いた。

文禄元年に秀吉が朝鮮へ出兵すると、昌幸は嫡男信幸次男幸村をつれて肥前名護屋に在陣したが、異国の戦場へは従軍せずにすんだ。その代り文禄三年、秀吉が伏見の築城を開始するや、真田父子は工事を分担した。そして同年九月、嫡男信幸は従五位下伊豆守に、十一月には次男幸村が従五位下左衛門佐にそれぞれ叙任された。

昌幸は一徳斎幸隆より伝えられた真田の家名を、上田城主になってから二十余年の間に、今や宿

願通り武勇の誉で飾ったのである。

階下の出入口の扉が明いて、誰かが天守櫓へ登って来た。侍童がいそいで立つと、階段を覗いてから、

「高梨内記さまにございます」

昌幸に告げた。長い時間、北風の吹きさらす冷たい板床に控えていた侍童は、可愛気な頬を哀さに白くし、声も微かに震えているようだった。

昌幸は南の窓辺にたたずんでいた。髪こそ白いが、背丈の高い肩の怒った後ろ姿には、五十三歳とは思えぬくらい精悍でエネルギッシュな印象があった。

高梨内記は几帳面な足音を響かせながら、櫓上にあらわれた。

「いやはや、困りました。大谷の使者は、殿にご挨拶せぬうちはくつろがぬと申しております」

昌幸の後ろ姿は毛筋程も動かなかった。しばらくたって、

「刑部少輔さまが律義なお方とは存じあげておりましたが、家中の面々も律義と申すのか、強情と申すのか、いくら休息をすすめても諾きませぬ。湯茶にも手をつけず坐り込んでいる有様、全く恐れ入りました」

内記は言葉をつづけたが、それ程困っても、恐れ入ってもいない語調だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com